

桁打廻。大船には竹をあみて、ほげたの真中に打廻し、檣の當にして、帆のあげおろし、早き様のすべりに用。

打廻。檣の打廻也、帆桁に付て、檣のすべりにする者也、連歌産衣に、ほつ、まめ繩の後注に、檣を立帆を上る時、堅き木をみじかくけつりたるを簾のやうにあみて、はしらをまはし、はしらをすべらかし、まめのぼす物あり、船のことばに、猿すべりといへるものかと注せり、和歌八重垣には、舟の檣に筒をつけて、なはをくりあげ、くりおろす也、是筒と云は、打廻しのことを云と見へたり、按に、もとは打廻しの繩ばかりなるを、木をあみて付は後製成べし、然ればまめ繩とするも、一利有といへども、此繩は桁を柱に付るまでにて、あげさげする繩にあらず、今打廻しと云は、産衣後注のごとし、櫂を用て是を作る、其木を小猿と云、一ツにあみつらねたるを打廻しと云、

帆網

〔倭名類聚抄<sup>十一</sup>帆網〕文選注云、長梢所交反、師今之帆網也、

〔箋注倭名類聚抄<sup>三</sup>海賦、維長梢、李善注云、梢、今之帆網也、此併引正文、按李善又曰、以長木爲之、所以挂帆也、依此、梢當訓保偈多、然則長梢、皇國保偈多是也、帆之有保偈多、猶網之有綱、故或名帆網、又保偈多、維持帆幔、令取風、故或名帆維也、又張銑注云、梢、連帆繩也、又云、擧百尺之檣、連梢繩挂帆、席師說、以爲保豆奈者、蓋依張銑義也、集韻、梢、荊州謂帆索曰纜、亦是義、源君、擧李注帆網、引師說保豆奈、非是、又按廣韻云、梢、生絲縉也、又帆維、又云、梢、船舵尾也、又枝梢也、梢、梢二字不同、蓋梢、本枝梢字、梢、本縉帛字、而廣韻、梢字、訓帆維、文選長梢、從糸、似是、然帆網以長木爲之、則謂之梢者、枝梢之轉注也、當作長梢爲正、後依綱維之義、改從糸、遂混縉名之梢、源君所見文選、未經俗寫也、其船舵尾名梢、亦以其狀如枝梢、得是名、所以得名則同、而其物自異、

〔類聚名義抄<sup>三</sup>長梢〕ホツナ〔同<sup>六</sup>帆網〕ホツナ

〔和漢船用具<sup>十一</sup>帆網〕○中